

# 文法を面白く教えるには

田中 実

## 1. はじめに

このたび、『改訂版 チャート式シリーズ ビッグ・ディッパー 高校英語』が発行されることになった。その改訂の概要は「はしがき」を読んでいただくことにして、さまざまな工夫がこらされた本書を通じて、学習者にはぜひ文法を習得してもらいたいと思うと同時に、欲を言えば、文法って面白い、とも思ってもらいたいのである。が、それには、教師の側でも文法を教える際の心構えとして、文法(や語法)の深い知識は欠かせない。では、その知識とはどのようなものか。

筆者はこれまで、CHART NETWORK 57号、83号、96号において、その「知識」の一端となるべきものを紹介したが、今回は「場面」設定による方法をいくつか見てみたい。(なお、「場面」設定をして、2～3の英文の中から正解を1つ選択してもらった上で、「説明」を施すといった形式による拙著には『英語構文ニュアンス事典』(北星堂書店)、『決定版 差をつける英会話』(PHP 文庫)、『通じる英語言いまわし練習帳』(幻冬舎文庫)などがある。)

## 2. 場面設定と説明(その1)

「それ、私の写真(picture)です」は、

- (1) It's my picture.
- (2) It's a picture of me.
- (3) It's a picture of myself.

で表せる。その場合、(1)は状況次第で「それは私の写った写真です」とも「それは私が所有している写真です」とも解釈され得る。では、(2)(3)はどうか。

学習者に説明する場合、(2)では人称代名詞の目的格である *me* が、(3)では再帰代名詞の *myself* が使われている、と言っておけば文法的にはそれで十分であろうが、ここで、もう一步踏み込んで、次のような「場面」設定をして、両者の違いを説明すれば、興味を抱いてくれる人が出てくるかもしれない。

### 【場面】

某週刊誌の扉のページに A さんによく似た写真が載っている。友達からそのことを指摘された彼女は、まるで他人事のように、遠慮がちに、自分の写真であることを認めた。では、その A さんの言葉を表すとすれば、(2)それとも(3)?

### 【説明】

(2)は「それ、私の写真なの」といった普通の言い方、(3)は「遠慮しながら、しかも他人事のように自分のことを話している」といった感じ。つまり、再帰代名詞には「いつもの私、平素の私」といった意味合いがあり、わざわざ、とり立てて言うほどのことではない、といった含意を伴う。

こうした「場面」設定と「説明」で学習者が興味を示してくればしめたもので、さらに、関連する人称代名詞と再帰代名詞の使い方の違いに触れておけばよい。例えば、次の(4)(5)を見てみよう。

(4) She pulled the blanket over her.

(5) She pulled the blanket over herself.

### 【場面】

深夜、友達の下宿に転がりこんだ A さん。2人で毛布を1枚かけて寝た。明け方、寒くて、毛布を自分のほうにぴったりと引き寄せた A さん。では、その A さんの行いを表すとすれば、(4)それとも(5)?

### 【説明】

通例、「場所」の前置詞のあとでは、代名詞の単一形が、運動の「方向」の前置詞のあとでは、代名詞の再帰形が置かれるのが原則。そこで、(4)では単一形の *her* が使われているので、*over* は「場所」を表し「毛布を体の上に引っぱった」という意味になる。他方、(5)では再帰形の *herself* が使われており、*over* は運動の「方向」を表し、「毛布を彼女のほう(自分のほう)に引っぱり寄せた」という意味になる。そこで、上の場面では、(5)を用いるのが適切。

同様の例として、(6)(7)を見てみよう。

(6) He hid the book behind him.

(7) He hid the book behind himself.

behind という前置詞は通例、「場所、位置」を表す。したがって、代名詞としては、(6)のように単一形を用いるのが普通だが、(7)のように再帰形が用いられることもある。その場合、(6)は単に「彼はその本を自分のいるところの背後に隠した」という意味を表すにすぎないが、(7)では「彼はその本を自分の体の背後に密着させて隠した」という意味になる。つまり、(7)の再帰形には、「体に密着させて」といったニュアンスが伴う。(Kuno (1983)参照.)

### 3. 場面設定と説明(その2)

文法を面白く教えるのに「場面」設定が有用であると思われる文法項目として、次に、(不)可算名詞を取り上げてみよう。

(8) She has a coffee-cup.

(9) She has a cup of coffee.

#### 【場面】

カフェで Aさんは飲み終えたコーヒーカップを手をしている。一方、Bさんは、まだ、おいしそうにコーヒーを飲んでいる。では、2人のうち、Bさんの様子を表すとしたら(8)それとも(9)?

#### 【説明】

(8)は「(空の)コーヒーカップを持っている」場合、(9)は「コーヒーを飲んでいる」場合である。coffeeは、通例、不可算名詞なので「1杯のコーヒー」は a cup of coffee であるが、可算名詞として用いて two coffees(コーヒー2杯)といった言い方も可能である。

ただし、これはカフェなどで注文するときに使える程度。したがって、「彼女はコーヒーを2杯飲んだ」と言うときは、

(10) (○) She had two cups of coffee.

(11) (×) She had two coffees.

ようになる。しかし、「ウイスキーを2杯飲んだ」と言うときは、(12)(13)のいずれでもよい。

(12) (○) She drank two glasses of whisky.

(13) (○) She drank two whiskies.

要するに、(10)(11)と(12)(13)との違いは、非アルコール飲料かアルコール飲料かということになる。

さて、ここで説明を終えてもよいが、さらに「文法は面白い」と学習者に思ってもらうためには、も

うひと工夫してみる必要がある。それが、(14)(15)のような例である。(CHART NETWORK 83号の拙稿でも少し触れている。)

(14) I had a cup of hot coffee.

(15) I had a hot cup of coffee.

「熱いコーヒーを1杯飲んだ」というような場合、いずれを用いてもよいが、実際には(15)が用いられることが多い。(詳しくは、田中(2011)や安井(2006)を参照されたい。)

それはともかく、(14)(15)のいずれを用いてもよいとされるのは、Quirk *et al.* (1985)が「a hot [cup of tea]=a cup of hot tea」と述べているように、いずれの表現でも、結果的に hot が tea(14)(15)では coffee)を修飾していることに変わりがないからである。また、常識的に考えても、hot coffee を cup に注げば、cup 自体も hot になるので、hot cup と言っても不自然ではない。

さらに、coffee を「熱い」と把握する場合、それは話者の主観的な感覚であり、話者はそのことを先に(すなわち、文のできるだけ始めのほうで)述べておくという心理が働く。(この点については、Athanasidou (2006)にも言及が見られる。)したがって、「熱い」ということを客観的に述べるだけなら、(14)のままでよいということになる。

ここまできたので、ついでに、(16)(17)のような例も見ておくことにしよう。(いずれも、BNCからの用例である。)

(16) Sit yourself down and have a nice cup of tea.

(17) I always hang up promptly and go out for a nice cup of coffee to cheer myself up.

(16)(17)の当該部分はそれぞれ、「1杯のおいしいティー／コーヒー」と解釈することができるが、Quirk *et al.* (1985)は、このような場合、nice はほぼ welcome に相当し、「歓迎する」ことは「おいしいものを提供する」ことにつながると述べている。もしそうならば、(16)には「お座りになって歓迎のお茶をお召し上がりください」、そして、(17)には「私はいつもすぐに電話を切って、自らを元気づけて迎えてくれるコーヒーを求めに出かける」といったニュアンスが伴うかもしれない。

つまり、(16)(17)ではそれぞれ、話者が歓迎する、あるいは、歓迎されているという思いが、nice と

いう形容詞によって間接的に表現されているのである。このことは、上で触れた Athanasiadou (2006) などが言う、主観的意味合いをもつ形容詞は語句の左手に置かれるとする考え方も合致している。すなわち、nice のような主観的判断を示す形容詞は、

(18) (×) a cup of nice coffee / tea

(19) (○) a nice cup of coffee / tea

のように、nice をなるべく語句の左手に置いた言い方のほうが好まれるということである。

では、なぜ、主観的な意味合いの形容詞は語句の左手に置かれるのか。それは、上で述べたこととも重なるが、話者は心理的に自分の思いの丈をまずもって吐露したいと考えるからであろう。その場合、英語のような右展開の言語においては、主観的意味合いをもつ語句は勢い文頭近く、すなわち、左手に出現することになるのである。

では、refreshing(気分をさわやかにしてくれる、すがすがしい、元気づける)といった形容詞が用いられた(20)(21)のような場合はどうか。

(20) (×) a cup of refreshing coffee

(21) (○) a refreshing cup of coffee

すぐにわかるように、refreshing の場合、refresh する主体は coffee ではなく、それを飲む人であることから、(20)のように coffee に隣接して refreshing という形容詞を置くことは認められず、いわば距離を置いて、(専門的に言えば、転位修飾された形での)間接的な形式の(21)しか認められないのである。

#### 4. 場面設定と説明(その3)

最後にもう1例、「場面」設定と「説明」を試みてこの稿を終わることにしよう。(22)(23)を見られたい。

(22) They did shopping.

(23) They went shopping.

##### 【場面】

転職することになった A さん。単身赴任なので、身の回りの必需品を奥さんと買いに出かけた。かなりの品数だ。では、その2人の本格的な買い物の模様を描くとすれば、(22)(23)のいずれが適当か。

##### 【説明】

(22)の do shopping は「ちょっとした買い物をする」ような場合、(23)の go shopping は「本格的な買い物をする」ような場合と区別される。

つまり、(22)は文字通り、「買い物をした」という

意味だが、(23)は「買い物に出かけた」という意味で、わざわざ「出かける」といった含みがある。そこで、ここでは、(23)を用いるのが適切。

ちなみに、(22)の shopping は名詞だが、(23)の shopping は動名詞とする考え方もあるし、副詞文句(adverbials)とする考え方もある。

では、もう一度、(23)(24)として再掲)と(25)(26)を見てみよう。

(24) (○) They went shopping.

(25) (×) They went working.

(26) (○) They went to work.

(24)の「彼らは買い物に出かけた」という言い方はよいが、(25)の「彼らは仕事に出かけた」という言い方は認められない。なぜか。

shopping は通例、〈余暇的な行い〉を表すが、working は余暇でやるようなものではなく、生活の糧をかせぐために汗水たらして行う真剣な行為だからである。つまり、go のあとの-ing 形は〈余暇的な内容〉の言葉でなければならない。さらに、Silva (1975)によれば、go のあとの-ing 形は〈体を動かす〉、〈決まった規則に縛られない〉、〈場所から場所への移動が絶えず伴う〉といった内容の言葉が置かれることも要求される。

#### 参考文献

- Athanasiadou, A. (2006) 'Adjectives and Subjectivity' *Subjectification* by Athanasiadou, A. et al. (eds.) 209-239 (Mouton)
- Kuno, S. (1983) 'Reflexivization in English' *Problems in Syntax* by Tasmowski, L. and D. Willems (eds.) 257-272 (Plenum Press)
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman)
- Silva, C.M. (1975) 'Adverbial -ing' *Linguistic Inquiry* 6:2. 346-350 (MIT Press)
- 田中 実(2011)「a cup of の文法」『人文論究』第61巻3号1-10
- 安井 泉(2006)「英語表現のバリエーション語彙と構文の英文法(2)」『英語教育』5月号
- BNC (British National Corpus)
- (URL : <https://www.english-corpora.org/bnc/>)

(元関西学院大学 教授)